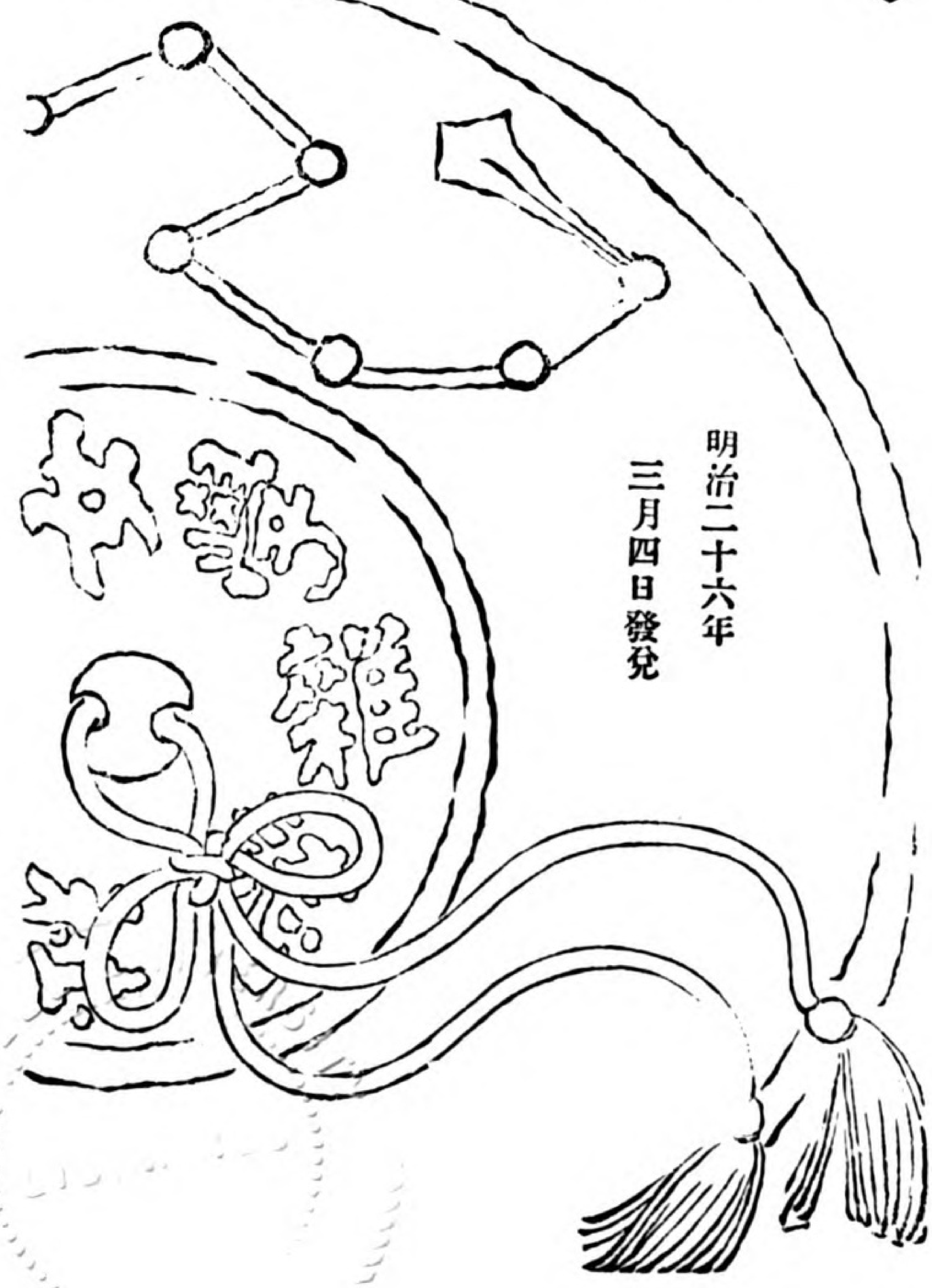
Mav. 1893
no. 337-?

# 女學雜誌

第三百三拾九號
乙の巻




明治二十六年三月四日發兌

## 注意

徳川文明夫人の傳　内藤耻叟述
ウィラード改悔の記　社員筆記
ひろひ兒　若松しづ子
斯の如き男子を世に下す多からしめよ
女子に學問を勸る文　孤女學院一女生

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雜 學

# The Woman's Magazine.

## (JOGAKU ZASSHI.)

No. 339. MARCH 4th. 1893.

EDITORIAL:—Politics do not cover All that Concerns a Nation. The Signs of the Times. What is Reform? A New Phenomenon is the Christian Church. What Mr. Tetsujirō Inoue Writes about the Christianity in Japan.

NOVEL:—"Kuchinawa Monogatari." (Kwaho.)

MISCELLANEOUS:—A Cup of Tea at the Recruits Mountain Home. After Coming Home from Mr Inoue's Funeral. Journal of a Mountain Home. Storm of the Coach.

BIOGRAPHY:—Abraham.

FRAGMENTS:—Germany's Military Law and Social Reform.

## 本號(第三百三拾九號)目次

○社説　愛子を罪人となす者は誰ぞ
○講義　繪畫は建築上の美術
○史傳　ウイラード改悔の記○斯の如き男子を世に下す多からしめよ（バットラー氏）○德川文明夫人の傳
○兒藍　ひろひ兒（若松しづ子）
○家政　家事小言（二）ふみ子○家内重寶錄（梅花の挿し方）○田家のこよみ
○雜錄　ひな遊び（ふみ子）○女子に學問を勸むる文（孤女學院一女子）
○批評　女子的風雜誌○御國の母○女子書翰文
○摘要　宗教に關する女學校に望む○經濟上に於ける女子の勢力
○女報　數十件
○孤兒の友　孤女學院、曉星園報告

## 前週白表(第三百卅九號)

○社説　國事は政事○時勢論○改革の辨○教界新現象○我國倘如斯（井上哲二郎氏）
○小説　蛇物語（花圃女史）
○雜錄　草庵の澁茶（暗光廬主）○井上大人の野邊おくりのかへさによめる（殘花）○山庵雜記（透谷子）○沖の嵐（紫苑山人）
○史傳　アブラハム（土井久壽彦）
○摘要　獨逸國に於ける軍制並に社會政頁
○批評　武道秘訣合氣之術○詩篇若葉（透谷子）○文祿の役に於ける小西行長○滄庵先生○大磯海水浴場の恩人
○時事　名士政談錄（大隈伯、安部井盤根、犬養毅、白根專一、尾崎行雄、佐々友房、の諸氏）○植氏協會○後藤昌直氏布哇行
○片々

## 前々週赤表(第三百卅八號)

○社説　歲費の十分一○家族の會話○海外渡航婦女取締條例
○史傳　小公子著者バーネット夫人の傳○バットラー氏夫妻（其廢娼運動）
○家政　家事小言數則（ふみ子）○田家のこよみ（畜鋤子）○今昔物語○針錢○結婚のゆびわ○ウエスト女史の筆の跡「新日本」
○兒藍　ひろひ兒（上）しづ子
○摘要　合衆國が拂ふ酒類の價幾千○女哲學者
○女報　數十件
○孤兒の友　愛岐震災自助會

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百卅九號 明治二十六年三月四日發兌

## 社説

### 愛子を罪人となすものは誰ぞ

人の始めて生るゝや、生死の際み、一吹の呼吸に別れ、命壽の短長、一髪の斷續に繋がる。此時に當りて、生殺與奪の全權力を握るは、父母なり。夫れ、人形一つを賜はるすら、忝けなきに、生きたる人の一身を與へ委ねらるゝは、何如斗りの幸福ぞ。天地間、其の尊ときと人類に及ぶものあらず、たとひ全世界の富を得とも、若し人の生命を失なはば、何の益あらんや。斯程に尊重す可き寶を任托せらるゝに於ては、其責の重きは亦明かなり。

然れば、父母は、子の育て方を好く辨まえ、深く生理の道に通ぜずんばある可らず。此の心得なくして親となるは、菽麥を辨ぜずして農夫となるに均し、何如にして、程好く種まき甘まく育て、適當に收納することを得んや。心なき草類を取扱ふすら既に然り、况して、感じ深く損はれ易き人の幼なきものを遇しらふに於てをや。むかしの學者は、「未だ子を養なふことを知りて而して后ち嫁ぐものはあらず」と云ひしが、此は開けざる折の言葉にして取るに足らず。方今もし育兒の心得なくして母となる人あらば、單に之を指ざして愚なりと云ふべからず、寧ろ慘酷なり無情なりとこそ言はめ。

新たに子を擧けたる親の懺悔に云へらく、分娩の期漸やく近づくと云へど、只だ案ずるのみにて左して苦しく思はざりしが、一聲高く風を破り、呱々として緑兒快ちよく產れ出でしより此の方、目前に一個の小人間を與へられて、初めて愕然として驚ろきたる心地し、抑も〳〵之を如何にして育つべきやと云ふ掛念初めて起りたり、啼く聲毎に、其啼く所以の意味を知らず、何如にして宜しきや狼狽を極めたり、今にも死にはせずや、直にも呼吸塞がりはせずやと案じ、只だ茫然として打眺めたる耳。此に至りて、初めて育兒法を心得置かざりし不覺悟を覺り、他人をして決して此の悔を重ねしめじと思ふの念切りに起りたり、と。

此の經驗を爲しのみにて、其愛子幸はひに育ち行かば、祝す



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

べし。左れど、世には、親の不覺悟によりて其子を殺すもの滔々として多し。此の親にして、もし其不覺悟を考ふる時は心中の苦痛更に幾干ぞや。眼前に冷たく横たはり、蠟の如く蒼白にして生氣なき死せる吾愛子は、わが無學なりしの故に死せり、土を堀りて骸を埋むるも、其親なり、一生の緣を斷たるも亦た吾なりと思はんとき、其の憂ひ幾干ぞや。万金を失ひたる人は、尚ほ回復するヿを得可し、此の憫れむ可き人の歎きは、遂に醫やす可らず。

然りと雖ども、生かすのみにて、教えざるは、尙ほ殺すに均し。親の務めは、單に其子の身躰をして壯健ならしむる耳ならず、併せて其子の心を適當に練養せずんばある可らず。此に於てか、身躰の育て方を知ると共に、心の養ひ方を學ぶの必要あり。育兒の道に於て、其心理の學を切要とする所以は是れなり。

此故に、人の子の親たらん人は、生理、心理等の道を好く心得、愛子が身躰を丈夫にし、心を開發し、躰力腦力の二つに於て、共に十分の發育を遂げしむるヿを肝要とす。此等の心得なき女は、たとひ簞笥長持ありと云ふと雖ども、未だ嫁入道具を備へたりと言ふ可らず、裁縫割烹に熟れたりと云ふと雖ども、未だ夫人たるの技倆を得たりと云ふ可らず。然るに、鄭重周密に問合せを爲す族も、未だ此點に注意するに至らず、血統、家柄、持參金、の類ひ、又は、目元、鼻すじ、丈、恰好などの邊にのみ掛念して、毫も此の最大緊要の所ろに考へ及ぼさゞるは野蠻なりと云ふべし。嫁取の問合せに、育兒法の心得ありや無しと研究するに至りて、初めて文明の代に入れりと云ふべし。

右の一理は久しく無頓着に置れたるが、近年追々之に心掛る人の增し來るは、切めてもの慰さめなり。然るに、有學の君子にして、未だ尙毫も考へ及ぼさゞるは、親としての道德上の準備如何んと云ふの一事にぞある。人に於て、尤とも尊ときは、其の道德にあり。親にして、子に掛念すべき第一の事は、其品行にあり。たとひ、身躰壯健にして力能く熊坂長範を挫き、壽長くして齡ひ盜跖に超え、多智多能なると數多ある何々子僧を一つにせしほどなりとも、もし其道德にして美ならずとせば、何の甲斐あらんや。故に、親が其子の生育上に、最とも切に掛念すべきは、道德品行の事なりとす。

然るに、子の德行は、一に親に似るものなり。親不正直にして、日々僞りをのみ爲すの家に、高潔謹嚴の子を得べけんや。子は何事によらず、親の眞似を爲るものなれど、品行の上に於ては、一層多く眞似すると見へたり。左れば、親たる人の德修まらざる間は、其子如何に說法々談を開くとも、殆んど何の効あることなけん。

此故に、親は、其子の一生の爲に、先づ自個の道德如何なりやと省みざる可らず。己が癇癖は、癇癖として直ちに映る。己が我儘は、我儘として直ちに映る。其映ることの早く且つ明らかなる、寫眞を撮るに異ならず。心ある親は、其子の惡癖を見る毎に、自個に省りみ、果して其本源の己に存することを知りて、背に汗すること幾度ぞや。其子を叱らんとして、先づ我心を咎むること、又幾度ぞや。

此の修養未成らず、成らざるのみか、毫も之に掛念せずして、而して早く人の親となる。此親、其惡癖を子に傳へ、傳ふるによりて彌よ之を助長す。かゝる親の子を產むは、世に罪惡を擴張する也、不德の子孫を勉强して蕃殖する也。苦しきこと幾干ぞや。故に、新教育の鼻祖ペスタロッヂも、嘗ては此心を左の如くに慷歎せり、

ヲー吾子よ、吾子よ、吾子と云ふは何如に恐懼すべき哉吾もし汝に對して吾義務を怠たり、汝をして汝が正しき道の外に迷はしめば、汝は彼の日審判の主の前に於て、汝が父を非難し、汝を惡しく導びきたる其父を責むる者となるべし、左れば吾は、汝の顏を見ず、海の底に投入られし方幸はひなりし、神よ願はくは吾子を保護し玉ひ其靈魂に吾罪の感化を入るゝことなからしめ玉へ。

ペスタロッヂ倘ほ此の罪を懺悔せり。尋常世人誰か此の罪なからん。たゞ自から思はざる耳。思へ世の人。汝ぢわざ〳〵一個の人間を世に產みて、而して其純白なる心に消がたき汚點を與へ、万物の靈長、永遠の靈魂をして、早く既に罪の奴たらしむ。此子長じて物心つき、獨立して試みに己が心を用ひんとすれば、其心は、既に惡習に染められたり。彼は容易すく之を洗ふこと能はざる也。彼は生れ乍らにして曲僻の子となりし。あゝ、如此くするの罪、誰に歸すべき。これ、其子を愛すと稱する所ろの眞の親なりと云はゞ、奇怪何ものありて之に及ばん。

# 雜録

## 繪畫及建築上の美術

問　繪畫の進歩を測りて、國民の進歩を知ると云ふ道理は何如ん。

答　そは、繪畫なる者が人の思想を現はすものなるに由る。蓋し、繪畫の目的とする所ろは、此の現はすことを爲すにあり、此現はすこと十分なるほど其繪を進めたるものとす。故に、繪畫が國民の智識の進歩を示すこと文學と異ならず。之によりて、美術者自身の思想を知り、亦之を賞賛せし國民の喝采によりて、當時の趣好の程を知る。

問　美術上の教育の高低を測り知るべき標準ありや。

答　あり。そは、自然の在様に適ふとの多少、自然を重んずるとの厚薄、自然に忠實なるとの有無によりて測る也。

問　家の建て方、室内の飾り方などによりて、美術思想の高低を測り知ることも可き乎。

答　不可なるにはあらねど、確かに測知することは難し。殊に、家屋は、自からの好みに隨ひて建築し得ること甚だ稀れなり、多くは其建築費に制せられ、又は地所、規則などに縛られて、思ふ存分の意匠を凝らすことを得ず。都合の如く、度々移轉する地にては、一層然り。田舍は代々相續の舊家なれど、建てし先祖の意匠が當の主人と同じきにあらず。故に、家屋の建方によりて、住む人の美術思想を測ること極めて、ふたしかなれど、室内の飾り付に至りては、幾分か好く此思想を現はすなり。

問　西洋人よりも東洋人の方、美術思想に富み、亦進歩せりと云ふ說は眞なりや。

答　必らずしも然らず、先づ繪畫の事に付きて言はんに、東洋には、便利、實用、飾りの用、などにする性質多くして、眞と大繪畫と稱すべき意義に適するもの乏し、他の諸々の美術に於ても、亦た此の憾みあり。

問　美術上の趣味（テースト）と云ふは、何如なるものぞ。

答　美術上の趣味とは、調和、恰好、釣合などの知覺を言ふなり。

問　美術上の要則とも云ふべきは何々なりや。

答　違し、色と組立とに於て、情操、創意、調和の三を好く含むべきとならん。

問　美術上の實際派と理想派との間に、矛盾ありや、又は兩立すべきものなりや。

答　美術に取りての、肉躰と靈魂と云ふが如し、双つ乍ら共に立つべきものなり。

問　固有定則に余り多く注意する時は、反つて創意の力を減ずるとなからずや。

答　然り之れあり。左れば美術者が、夫々の固有定則に注意するとゝ、宛がら鳥が空中を飛ぶに當りて其羽翼に對し掛念する如き程に過ぎず。たゞ其の思想概念を現はし出すとを得んとする迄なり。

問　之に反し、固有定則を忽諸にする時は、思想概念を現はすの力を減ぜずや。

答　減ず。左れば必要の限り迄は、固有定則を好く辨まへ知らざる可らず。文章を作る前に、文字を知り置かざる可らざるが如し。

問　製作者の氣質が、其製作せし美術品の上に現はるゝとありや。

答　もとより有り。殊に、製作者が、思ふまゝに製作せし時尤とも然りとす。但し、製作者は、他の注文によりて描がふると多くあれば、其製作の品題よりは、此品題を作り出す作り方の上に於て、多く氣質を現はすなり。

問　初學者の學ばんには、何によるべき。

答　若し美術を正直に學ばんとし、又之を寫し之を畫くとを得る丈けの力あらば、人々「自然」の書を見るに如かず。左れど、美術の事に付きて知識せんと欲する丈ならば、英書にては、ラスキンの著書を第一とし、ゼームソン夫人の美術書並に、ヲークレー氏の美術生命論("The Art of Life and the life of Art" by Alex.F.Oakley) なぞを讀むべし。

問　女子教育に繪畫を習ふの必要ありや。

答　子供は繪を好む、馬を一つ書くにも母は其たしなみ無る可らず。又、器具を注文するにも、絹がらを択くにも、万づ家内の用を爲すとき、此の心得あらば大層の益なり。況してや、女子は美術思想に富まざる可らず、たとひ實用なしとするも、尚ほ繪畫は學ばざる可からず。

# 史傳

## ウイラード改悔の記

人の改悔の實話を聞くは、神學の講義を聽くよりも力あり。人の靈變の物語りを耳にすれば、道話の書を眼にするよりも感深し。況してや、玆にフランセス、ウイラードが、其改悔して主の僕となりし履歴を自から物し、明らかに靈魂の歩みを書とめたるものを見るに於ては、後學女生を益すると、眞とに尠からじ。而して、此は、ウイラードのウイラードと云ふべき人が記錄なれば、其の第一の傳記は是なりとて、本欄内に掲ぐ。

（其一）

…………妾は、腸チブスの病に罹り、イリノイ州、エバンストンなる我家にて、床の上に打臥し居たり。時に、一千八百五十九年（今を距る三十四年前）六月某の日の夜なりき。受持の醫師言へらく、最早遠からずして一大事の危機近づかん、と。妾は、遙かに其聲を聞たり。母は、次の部屋にて看し玉へり。

此時、妾が全心切まり、自づからにして心中に二つの聲あるを聞きぬ。其一つは云へり、

吾が愛子よ、吾に汝の心を與へよ、吾は久しく喜びを以て汝を呼べり、今は懲戒を以て汝を呼ばん、左れど、斯く汝を呼ぶは、只だ吾が永遠の愛を以て汝を愛すればなり、と。

又の一つの聲は云へり、

斯く決意し斯く強固なる汝は、身躰弱ければとて、今ま倒るゝとはあるまじ。汝は論理に富めり、而して未だ基督教の道理あるとを認識せざりしならずや、毅然たれよ、汝、痛愈ゆれば亦元の如く感ずるとを得べし。

初の聲は、温たかに、かゞやき、且つ安全にして、喩ば雪の翼を擴ろげたるが如くにして、來り。後の聲は、冷やかに、憂はしげに、暗らくして、宛がら蝙蝠の飛ぶが如くにして來りたり。二者の相違顯然として、極めて長く心の上を銘したり。蓋し、病中なるをもて、實際よりは更らに長く感ぜしとも見へたり。則はち、嚴そかに、斷然として、全心をこめて

自から斯く言ひぬ。もとより英語にて言ひしならず、更に意味深き心中意識の語ばを以て、斯く言ひぬ、

もし、神、妾を愈やし玉はゞ、妾は試みてクリスチアンとならん。

此時、妾は十九才なりき。かく、心中に決せしかど、而も尚平和なかりき。然るに、引つゞき、

汝は、直ちに其決心を宣言せざる可らず、

と言へる如き聲、自から心中に聞へたり。

妾が、母上に對し祭つる、何事にまれ打あけ參らせずと云ふとなし、其間だ尋常の母子の比ならずと深く自信するほどなるに、不思儀なるかな、此の決心は何故か之を母に告白すること能はず。此決心を爲せしすら、降服の心地して容易に隨はざりしに、之を母に告白するに至りては、更に一層の苦痛なりき。烈苦の戰の後ち、吾が心を神に捧げて其力を請ひうけ、最も微かに、母を次の部屋より呼び、かく言ひぬ、

母上、神もし病を愈やし玉はゞ、妾は之より信徒の娘たらんとを試みんと思ひ侍る、と

母は、其が儘、吾が手を執り、床の傍らに跪まづき、泣いて祈り玉へり。妾は顔を壁の方に反向けて靜かに眠りたりとぞ。

## パットレル夫人の良人

前の號二回に於て、パットレル氏夫妻の愛と、働らきを記したり。其末文に云く、パットレル夫人が著書を讀むもの誰か夫人と共に天を仰ひで「神よ、斯の如き男子を地上に下す多からしめよ」と祈らざるものある可き、と。故に此の男子たるカノン、パットレル氏の事を略して此文を終らざる可らず。

氏の父はピーターボローの教職に在りし人にして、亦質實なる博愛家なりき、十人の子を有しヂョーヂ、パットレルは其の一人なり、嘗て寒中騎馬にて外出し橋を過ぎしに下なる水中に何者かあるを見て、直ちに寒を冒して飛び入り終に一人の婦人を助けし事あり。ヂョーヂ、パットレル氏は氏の父より完全なる教育と修練とを得たりしなり、氏は思想上にもあれ身躰上にもあれ何事にも人に長じたる人にして、騎馬射撃

游泳等一ッとして能はざる事なかりしはフルード氏も證せし所なり、殊に戸外の運動には妙を得たりと、氏も父の如く水に溺れんとせし人を救ひし事あり、氏の救ひしは貴族にして即ちリンゲン卿なり、夫人の手記に曰ふ「わが夫の藏書の内にホーマーのオデッシーとイリアッドとあり、是れはわが夫に依りて危難を免れし人よりの賜にして其の卷首に語あり、「千八百五十年パットレル氏と海水に浴し、誤つて深きに入り出づる能はず、幸にしてパットレル氏の助を得て出づるを得たり、氏にして在らざるか或は氏の余を助くるの勇氣なかりしならば余は今日在るを得るや否や頗る疑はし」と、氏は又其の友フルード氏が愛蘭に於て天然痘に罹りし時も、寒氣を顧みず熱心に看護して終に自らも熱病に罹るに至りし事あり。

パットレル氏を以て單に冒險的運動的に大なりしと云ふのみにては、甚だ氏の人物を顯すに不都合なりと云はざるべからず。氏の永眠に就くや英國の大判事コレッリッヂ卿書を夫人に送りて曰く「余は常に君の夫パットレル氏を敬慕せり、啻に其の事業に就てのみ云ふに非ず、實に氏の人物の大なるに在り品格の高きに在り、其の主角のなきは偶ま人をして氏の傳を爽快に記する能はざらしめたり、學者にして學者の如く語らず、美術家にして猥りに之を論ぜず、語學家なれども人に知らしめず、滑稽を有せども之を猥りにせず、運動家なれども誇らず、力量あれども位置の高きを貪らず、己より劣れるもの丶高く進むを見ても羨まず、此の外其の品格の美わが言ひ盡し得べきに非ず是は直に其の一端のみ云々」と、當代の大家コレッリッヂ卿、フルード氏、パットレル夫人の三人に斯く感ぜしめたる人は誠に其の品格の尋常ならざるものありしに依らずんばあらず。

氏の教育事業に付ては今此處に詳細を述ぶる能はず、只其の著しきもの一二を擧げん、氏は教育革新の率先者なりき、學校に地理の科を設くるに至りしは氏に始まれり、オックスフオルドに於て美術を實行的に學ばしむるを奬勵し、同校の博物學研究の擴張に盡力し、博物館の書記となり、婦人の高等教育を主張し、大學講義擴張會の主張者となり、リバープール教育會の下に少年の俊才に資金を與ふるの件に周旋し、英國憲法史の研究を普及せしめんとせしが如き大畧是れなり。

氏は是より宗教界に入れり、然れども普通の牧師の如き者に非ず、教育の大任を完ふせんが爲めに此の道を執りしのみ、當時氏が父に送りし書中には「彼れ俗僧人に非ず、彼の長衣正服畢竟虚僞のみ」とまでに極言せり。

氏の眞理に向て猛進するや獅子の如く、亞米利加の内亂を聞ては夫人と共にオックスフオルドに其の成功を祈り、リバープール自由の同盟を見ては口を極めて賞讃せり、又嘗て牧師の集會に其の弊を列擧して人々の忘る可からざる大混亂を惹き起すまでに痛言せり、氏は熱血を注ぎて曰く「若し今日の教師牧師をして、眞理に反し、奴隷を奬勵し、ウエスレー、ホイットフ井ールドを放逐するもの、鼻息を覗ふが如きものならしめば亦英國の人民は大に叫びて、英國教會の非を鳴らさん、若し今斯くの如きものあらば此の地より放逐すべし」と、此の痛言如何に聽き居たる牧師の意に逆らひけん、一同騷ぎ立ち氏をして又言ふ事を爲さゞらしむるに至れりと。

アポリオン（悪魔）の毒劍はペットレル氏夫妻の事業の上に蝟集せり、夫人の手記に曰く「わが事業に對して論難攻擊批評果ては嘲弄罵詈までも集り來り、甚しきに至りてはわれ等を以て僞善者となし、室家の快樂なきを以て止むなく出でゝ社會の事業をなすに至れるなりとまで言ふに至りぬ」と、アゝ斯く言ひし人今日如何に感ずるならん。

廢娼案の國會に出ずるや保守派の老將ヘンレー氏眞先に論じて曰く「之れ實に婦人が其の足を千代の礎の上に置きて爲せるものなり、彼等は此れに依りて如何なる十字架を負ふべきやを知りて決心せしなり、見よ基督が死に臨むや使徒等は捨てゝ去りたりき、然れども婦人等は終りに至るまで共にありき今日の婦人亦斯くの如しと。カーヂナル、マンニング又此の擧を賛して紹介書を婦人に與ふ其の内に曰ふ「此の婦人は尤も困難なる又尤も必要なる事業を執れり、君願くば此の婦人に奬勵と補助とを與へよ」と。

## 故徳川吉子夫人の逸事

とよ子

故徳川貞芳院吉子の御方といへりしは、水戸烈公の婦人にて夙に賢徳の譽れ高かりし御方なり。されば去月下旬東京小梅

なる德川邸にて、永き眠りに就き玉ふや、諸新聞競ふて其御傳記逸事など掲げ奉り、知るも知らぬも其御賢德を稱し奉らぬものなかりき。我社は平素女界の事には密接の關係あり、殊に同夫人を追慕し奉るの思尋常に非れば、一層其詳なるとを窺ひ知りて、汎く世の姉妹方と共に、其芳しき御殘りの香をとめばやと思ひ、往年水戸の弘道館に在り、當時の事情に明らかなるべき內藤耻叟翁を訪ひぬ。翁は快く妹を引見して詳に語り懇に說き玉ひしかば、妹は今左の御逸事を齎して以て讀者たる我姉妹に紙上に見ゆる事とはなりぬ。

吉子夫人は故有栖川熾仁親王の御女にして登美宮と稱し奉りし御方なり。文化元年九月の御出生にて今御逝去の年は、九十の高齡に在らせ玉へり。其幼時如何なる御敎育感化を受け玉ひしかは、今之を窺知るを得ざれども、芳紀未だ二旬に達し玉はざる頃より、時の主上光格天皇の殊寵を蒙り玉へりしといへば、其御資質尋常の御婦人に非ることを、夙に英主の知し召す所となり玉ひし故にやと恐察せらる。而して主上も常に吉子の方は關東の方然るべき諸侯に下れたしとの御內意あり、吉子の方も亦慮り玉ふ所やありけむ、御年闌るまで何へも御緣組なかりしが、折ふし水戸家より御緣談あるに及で快く御承引あり江戸の水戸邸へ入輿ありしなり。是蓋し偶然の御合意には非ず。主上も內々烈公を賴み思召され、吉子の方も亦しか思ひ玉へりしに依りて容易く御承引ありしものか。其は兎に角後年水戸烈公が勤王の志厚く美名海內に轟きしを以て見れば一方には吉子夫人の識見高かりしを證し、又一方には吉子夫人が內助の功尋常に非りしことを想像するに餘あり

夫人は和漢の學に通じ、又和歌手蹟を能くし玉へり。而して音樂の道にもおさ〳〵暗からず、殊に笙篳篥などの吹き物には御堪能の聞こへありしなり。水戸家へ御入輿の時に當たりて、主上御手づから櫻の若苗を餞として下だし賜はりしを、吉子夫人御持下りあり、小石川の水戸邸へ御植置ありしが、翌年水戸へ御入城の砌弘道館前へ移つし植しめたまひて其の右方に松の樹を植へ以つて紫宸殿なる左近の櫻右近の橘に擬へ玉へるが、今も猶弘道館に在りといふ。其の平素の御行跡御德行の箇條などは、奥向きに親しく仕へ奉りたるものに非るよりは、其頃の習慣殊に高貴なる御方とて、一々窺ひ奉るに由なきも、烈公に對しての御內助一方ならず、

又公武の間幷に水戸家と將軍家との間に處して御斡旋容易ならざりしヿは、其當時の人々の確に記臆する所なり。又家中の士に對しても御慈愛深かりしヿは家士一統の感佩する處にして、何れも夫人の御仁德を慕ひ奉らぬものなかりしとぞ。今其一斑を擧げていはゞ、當時水戸の家中は、右黨左黨の二派に分れ、兩黨互に反目して往々藩主を煩はすヿあり。藩主も亦爲に時々之れを處罰せざるを得玉はぬヿなどありて爲に藩士中死に處せらるゝものなどあり。夫人之れを憂ひ玉ひて或時烈公を諫めて宣ふやう。凡そ水戸家の倉庫に在るものゝ內、先君威公よりの御遺物と申せば、殊に之れを重んじ玉ひて苟しくも毀損し玉はざるに、其御遺物の隨一とも申べき御譜代の臣下をば、却て輕々しく刑罰に處し玉ふヿあるは何事にておはしますぞ。當家の臣下たるもの何ものか威公よりの御遺物に非るものあるべき、何卒先君を敬ひ玉ふの御心以て此御遺物の隨一たる臣下をば第一に御秘藏在らせ玉へと。而して又家中一統へも夫人より同樣の意味以て御諭し在りしかば、兩黨何れも夫人の偏頗なき御仁德に感じて、互に相爭ふヿを愼みたりといふ。又此事に關して猶一事の內藤翁の記憶に存するものありとて語られたり。其は翁が或る事に與りて水戸の士獄に繫がれし事あり。一年を經て出獄せられしに其翌日藩主の侍醫關口秀南といへる人來りて翁の身に恙なきや否を問ひ而して懇に翁を診せんとせり。是はこれ吉子夫人が翁の安否を氣遣ひ玉ひて內々侍醫を遣されしものにて此時內藤翁と共に出獄したるものは何れも此恩顧を蒙りしとぞ。此一事を以ても夫人が家士を愛し玉ふヿの深きを推知するに余あり翁は此一事を語りたる際猶且語を繼ぎていはるゝやう此事に限らず、夫人が家士を遇し玉ふや其人の善惡邪正は姑らく措き、苟くも水戸家の士といへば如何なるものにも仁恤を加へ玉はざるヿなかりき。されば一藩の士其主義の何れに屬するに拘らず擧て君家を思はざるものなかりしは又夫人の御賢德の致す所なりきと稱嘆せられたり。一般の家士に對するは愛心既に斯の如しとすれば、其奧向きの侍女等に對しては如何に御優しき御行ありしかは想像するに余りあり。夫人は三男一女を擧げ玉ひ御長子は鶴千代君とて後に慶德公と稱す、他の御一男御一女は早世し玉ひ季は今の前將軍慶喜公にて幼名を七郎丸と呼ばれ玉へり。夫人の御實子は斯く四人にて渡ら

せ玉へど、其頃の風習とて烈公の侍女亦少からず現に御子を擧げたるものゝみにても幾人かあり。都合二十二男十五女在せしかば、庶嫡の別、側室の關係など種々御煩はしき御事情もありたらむなれど、閨闈の內至つて靜穩にて毫も紛爭の形跡なかりしなど、皆是夫人の德化に基かずんばあらず。夫人は斯く仁愛に富み優しき御方にて在せしが、一方には又男子も及び難き猛き性質をも具へ玉へり。其烈公の薨去し玉ひたる后水戸の藩士黨を分つて相鬩ぎ幕府兵を遣して之れを擊ち水戸の城下爭亂の街となりし際などは、折しも慶德公佛蘭西に在留し玉ひ、慶喜公も亦出て外に在り、城中主將と仰ぐべき人なかりしに、夫人は甲斐〴〵しくも諸士を統率して堅く城を守り玉ひ、炮丸の御傍近く飛來るとあるも、少しも之れを懼れ玉はず、然れ共臣下の者之れを氣遣ひて、他に遷し奉らむとせしに、夫人色を正して宣ふやう、我今此處を退くならば多くの臣下は誰が爲にか此城を守らむ。我は只此處に在りて諸士と存亡を共にせむのみとて、一步も退き玉はざりしかば、士氣是が爲に大に振ひ遂に無難に城を保ち得たるなど夫人の勇武の程を察知するに餘ある事もありき。其の烈公が一たび幕府の嫌疑を受けて蟄居の身となり再び讒に遭ひて水戸に屛居せらるゝや、其間に於る夫人の御苦心實に一方ならず。而して將軍家の大奧に緣故あるを幸とし之れに依りて烈公の爲に其御志を遂げしめむとし玉ひしと少からず。然れ共事秘密に屬するを以て一々之れを窺ふを得ず烈公の自ら書し玉へる科戸の風といへる、書中に、往々夫人の幕府の大奧へ向けて遣し玉ひつる御ふみの寫ありて、其御ふみに依れば、其頃夫人が如何に烈公の爲に計り玉ひしかを推知するとを得べし。故に今其科戸の風といへる御書中に收めたるものゝ中に就て其大意を揭ぐべし。(此科戸の風といへるは、烈公が江戸に於て幽蟄の身となり玉ひし際自ら其御記臆に存するとの中に就き、將軍家の嫌疑を解くの材料となるべきものを蒐集し玉ひて、時の老中安部伊勢守の許まで差出し玉へる書なり)

(前文は略す)さて公方樣日光御社參も滯なく濟せられ難有御事に存上候。中納言どのも御供首尾よく果され江戸表へ歸着の段此上なき仕合に存候……うす〴〵承り候へば中納言どのには水戸へ相下り候やうとの御內意近々に相下

り申べくとの事に候か、いかゞの御思召にて御坐候や。鶴千代事も江戸にあればいろ〳〵稽古致させ候にも都合よろしく候に、今中納言どの水戸へ相下り候やうの事ありては、稽古も半途にて止めさせねばならず候故鶴千代誠にいぢらしくいかゞやと心配いたし申候、中納言どのも何れよりか此事聞及ばれ候にや、御前にも何か不調法など致し御機嫌を損せしにはあらずやと大に心配の様子に相見へ申候まゝ私も心がゝりに存一寸内々にて此義御伺ひ申上候、私より此事相伺ひ候など中納言どのへ相知れ候ては、しかられ申候に付必ず〳〵何れへも御内々に願ひ候。今暫く江戸表に居られ候事相叶ひ候へば其内には鶴千代の稽古も出來申べくと只管中納言どの在府の義願はしく存候、只々何事も鶴千代いぢらしく存候より彼是心配いたし候事に付其邊御推し下され候てよろ敷御取なし願上候……

尚々精子様御事(將軍家慶公の女なり)は鶴千代へ下さるべしとも又は他家へ御縁組なさるべしとも噂致すもの御坐候、如何の御内意に御坐候や未だ御治定の事にもおはしまさずや。若し鶴千代へ下さる思召にて候はむには、猶更中納言どの在府の内に御内意のみにても相下り候やう願はしく、實は外々より縁談申込候節の心得も御坐候まゝ御様子承り置たく存上候……

月　日　　代思子

おみつさま

おさださま

(此おみつ、おさだといへるは、將軍家の寵を受けたる婦人にて達姫君喜千代君右大將家定公などを生み奉り上臈の首坐を占めたる婦人なりしなり)

是は必竟其大意を心覺のまゝ摘みたるものにて單に御文書に擬せしのみ。其御文辭は素より科戸の風に載する所のものとは似るべくもあらざれど、其必要なる意味のみを窺ふには、大なる相違なかるべしと思ひて便利の爲めかくはものしぬ。さて此文書に依りて見れば、表面上單に鶴千代君の爲に烈公の在府あらむことを内願し玉へるのみなるやうなれど、其實は時の老中水野越前守忠邦水戸公の江戸に在るを喜ばず、水戸に屏居せしめ參らせむと計りしを、烈公は又水戸に下ることを欲し玉はず。切に國家の爲に江戸に留らむことを望み玉ひしかば、夫人烈公の御意を汲み玉ひて、斯くは盡力し玉ひしなり。





Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

されど夫人の御苦心も其甲斐なくして、程なく水野越前守を以て、烈公に水戸に在城あるやうとの將軍の内命を傳へられしにぞ、夫人は再ひ書を裁して、大奥へ送り玉ひ責て將軍より表向きの御沙汰あるべきの時日を延ばし玉ひ、一日にても多く烈公の江戸に留り居玉ふ思召の達するやうに企て玉ひしかど、是亦其効なく遂に烈公は水戸を下り玉ふとぞなりしなり。其内讒者の言愈行はれ烈公は遂に御隱居の御身となり玉ひしなど賢夫人をして轉た御心を痛めしむる事のみなりしなり、されば其際に於ける夫人の御内助は其外にもかず〳〵在らせられたるべけれども他は之を聞知するを得ず。後慶喜公が將軍家茂公の御後見として幕政に與り玉ひたるの時にも亦夫人は裏面に在りて御力を添へ玉ひたる事などあり。其慶喜公が京都の二條城に留り居玉へりし際などには、江戸の老中等慶喜公の側に恭順を主とし玉ふとを喜はず。種々の異論を唱へたるものありしに、夫人は當時江戸に在せしかば是等の事情を委しく慶喜公に報し玉ひ爲に慶喜公は大に便宜を得玉ひしといふ。他日慶喜公が大政を奉還するに躊躇せず、帝室に對して恭順を旨とし玉ひたるなどは他有志の士の奨に基くとはいへ、又母夫人の與りて力あらせ玉ひたるに非ずやと思はるゝなり。其他尚ほ茲に夫人の爲に特筆大書すべき一事あり。其は歴史上にも著しき事蹟にして即ち宇多帝以來久しく天皇に諡を奉らず。徒に院と稱へ來りしのみなりしを、烈公の建議に依りて光格天皇より再び天皇てふ諡を奉るの典を復せし一事なり。此事たる素より烈公の勤王の志深きに依りしと雖も、抑も烈公をして茲に至らしめしものは、亦た夫人の與りて力ありし事は想像するに餘あり。斯く夫人御内助の美は、上は帝室へ對するの忠勤となり。下は臣下を懐くるの仁恤となる。其の御賢德の著しき嘆稱し奉るに餘あり。維新以後は宇内の形勢一變せしかば、最早夫人の力を用ひ玉ふべきこともなく、靜に世を送り玉ひしのみなりしが、夫人の如き忠君の心深き御方にありては、近來の政躰を慊らず思召玉ひしにや。將又た天皇の御名に依りて其の實薩長の士が自己の意思を成すなるを憤り玉へるにや。明治の初年に當りて或方へ御腹立ちの御意を通じ玉へりし事ありしといふ。夫人の御心としては是れも亦た御道理にこそ。其の高貴なる御方としては殊に難得き御健康を保ち玉ひ、九十の高齡にまで達

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

し玉ひたるの因は、平素釣を好ませ玉ひ又間々御庭園などを掃かせ玉ふ事などあり。兎角御運動をば怠たり玉はざりしと承れば是等や御長壽の御助けとなりしならむかと推測らる。

以上は内藤翁の話説に基くものなれど、間々妹の意見を挾みたる處なきに非ず。讀者幸に其心して見玉はむことを。尚ほ他日或る方より吉子夫人の自筆に係る短冊一葉を得たれば、之を掲ぐることもある可きなり。

## ひろひ兒の正誤

前號（第三百三十八號赤表）ひろひ兒には大ひなる誤まりあり諸君に對し御申譯なし。即はち、二十二頁上段十行の「眼をパチッカせて居るさ」は其前行の「例の黒み勝な」に續き乍ら、次葉の「たゞせられるが儘になつて」の下に入るべき也即はち、一文にして左の如し、

（二十三頁上段十三行の）何が何やら分らず、たゞせられるが儘になつて例の黒み勝な眼をパチッカセて居るさ…………

夫故へ、廿二葉上段九行「一向知りませんかつた」より、下段六行「冬の日あし短く」へつゞく可き也。

○グラッドストン氏が、英國々舍に在ること、通計六十年に超ゆ。

○彼のアバーデン伯爵夫人は、家に八十人の婢僕を使役し尤とも巧みに之を用ゆ。

○今年のシカゴ大博覧會にて、賞牌、賞狀等に添て用ゆべき賞金の高は七十万弗の定めなり。

# 兒藍

## ひろひ兒（中）

しづ子

其夜御新造はおうらに手傳わせて、翌あさ子供に着せるものを工夫し、取合せて床についた夜更のせいで、お目ざめになつた時、いつもより小一時間も遲く、勝手へ來て見れば、夕部の子供がおうらの丹精で顏も奇麗に洗ひ、頭髮も見事に撫つけて、火鉢の側に猫を抱いて居り升た。朝飯の膳立しながら憶し勝な子供の世話兎に角と忙がしきおうらは御新造に

アノ、御新さんへ、あの兒に御飯を遣るんで御坐い升か？さうとも、澤山おやりよ、一寸、おまへの名はなんといふのだへ？

小女は下を向き、手をモヂ〳〵しながら何もいはず、うらは側へより、いろ〳〵と賺し問ふて稍く尋ね出したるは名を「きく」といふこと、たんと家のある賑やかな方から來たといふと





Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

と、かねちやんとこへ歸るのはいやといふと丈でした。朝の片付も濟んでおうらは前垂に手を拭き〳〵、火鉢の向なる御新さんのまへへペツタリ坐り、

アノ、御新さん、おきくちやんをどふなさるお積りで御坐り升？

今、考へ最中だよ、台處で何をしてるへ、音なしい樣かへ

どうも音なしい兒で御坐い升よ、なんでもわたしがいく方〳〵とついて來て、ハタキを持てば、おんなじ樣に持たがり、雜巾を持てば又雜巾をもつて、それからわたしがお台處をするのをさつきからヂツト立つて見て居て、食物なんかにはチツトも手出しは致しませんよ、あんなものゝ子には珍しい樣です。

といひ升た。午少しまへに御新さんは躰屈の欠伸をかみころしながら思はず台處へ來ると、「おきく」は籠の中の小松菜をこしらへる手傳をして居升た。おうらはまた、いつものかつたるい樣な調子で、

御新さん、おひるも遣り升んですか、きくちやんに

ア、、さうとも、まだ好思案が出ないよ、どうしたら好かネ。それはさうと、うらや、此兒が居ると、何だか賑やかだネ、子供の居ると居ないでは家の樣子がコロリと違ふ樣だよ、ネ、さうじやないか………ア、おひるもおやりとも、音なしくして居れば。

夜になつて、おうらが雨戸を閉めに來升た時。また申升た、

御新さん、きいちやんを、どうなさるか、お考げいなせい升たかネ？

まだなんとも考へがつかないよ、此通り雨も降るし、するから、ネ、先今夜も泊めてやらずばなるまいよ、あしたになつたら何とか極めるとしませうよ。

併し翌日になれば、御新造はまた「あしたこそ」といひ、もふ〳〵一月過た後にも小女は何ともつかず其まゝ家に置かれる中に丸〳〵と肥えて、頬は櫻色になり升た、人に臆せた樣な恥らふ樣な處はまだ失せ切りませんでしたが、それが却つて小女の氣に入られる種になつて、御新造も下女も暇過ぎて躰屈なにうつて變つて、賑やかに、面白く暮らす樣になり升た。さうして、此兒をどふしよふといふ相談は自然いつの間にか

やんで、いつまでも家に居るものとおもふ様になり升た。暫らくの中は此小女ほど仕合せものはめつたにあるまいと思ふ程でした、深切で氣の長いおうらどんのあとについて用をする手傳をさせて貰つたり、お使に行く時一處に連れて行つて貰つたり、お勝手の火鉢の側へ奇麗な箱膳を出して、おうらどんとおとり膳でおまんまをたべたり、時々は御新さんの處へ郵便を持つて行つて、其かへりにおうらどんへ御用のお取續をする、午過になると、御新さんがおやつだといつて、蜜柑だのおせんべいだの持つて來て下さる、マアこんな嬉しいとはないと思つて居升た。併し其中に、御新さんを敬まふ心の中にこわいといふ念が雜じる樣になつて來升た。これまで小女は何の仕つけもなく、野放しに育つたと故、御新さんがソロ〳〵躾をするのだといつて、毎日顔と手を奇麗に洗はせ、髮もなでつけさせて、自分の居間へ呼よせ、小學入門の素讀を敎へ、雜巾に針目を拾はせなどして居る中に、小女は御新さんに一眼見られゝば、我知らず下を向く樣になり升た。

おうらは、氣の毒さうに小女の辨護をして、

おきくちやんは可愛さうに今まで何んにも知らねいで、わたしら見た樣に育つちまつたもんで、一寸にはおぺいられねんでがすべい

とまだ拔け切らぬべい〳〵をすぺらしていゝ升た。御新さんはおうらを少し叱る氣味に、

それだから尙もわたしがきちやうめんにするんじやないか、おまへ、はなんぞといふときくやの申譯をする樣なとをいふよ。

おうらは御新さんが何もかもよく御承知で、發明なかたと不斷から見上て居たと故、かふいはれて、恐れ入り、

おきくちやんに色々敎せいておやりなさるの、わりいとなんてはおもいませんがね、あんなちいせい兒のこつてすもんでね、ずねいなりいしてせい、ねつからおぺいられねいわしら見た樣なものもあるんですからね。

御新さんは中〳〵嚴しい方で、おきくを滅法可愛がつて居らつしやつて、こんよく面倒を御覽なさる中に、子供を甘やかしては爲にならないと仰つて、一度言ひ聞かせたとは何に限らず記臆て居ねば二度めには叱り、况して噓を言はれるとは何よりお嫌らいでした。これは御自分が極く正しいお人故、



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人の曲つたことは少しも用捨なさることが出來なかつたのでした。
然るに小女はこれまで荒〳〵敷計り取扱かはれつけて、たとひ叱られても罰しられても、嘘はいわぬもの、自分のしたことはわるいとならかくさず、本當をいふものといふことをおぼえて居りませんかつた。こはい〳〵で嘘を言いつけた子供を矯め直すは容易なことでは有ません。おうらはたゞ可愛さうでたまらず、此子を直すのはどふしても優しくして遣るより外はないとおもひ込んで居升た。しかしおうらは全躰むやみと人がよくつて、權理といふことも正しいといふことも充分辨へがなく、余ほどのことでなければ人をわるいとはおもへない方故、御新さんはおうらのいふことなどはお聞なさることでは有ませんかつた。
ある時。おきくが何か少しのことに嘘をいつたとて、御新さんが折檻なさつた上句に泣寐いりに眠つてしまひ升た時、おうらは彌こらへ切れぬといふ調子で、
御新さん、おきくちやんもわ。ゑい〳〵と思ふもんでツイうそをつくですよ、こわがらせせへしなければ…………
といふ、言葉をさへぎり、
こはがらせるつて、うらは、なにを考へてるんだらうネ、うそをつくと、こはいとおもはせる樣に仕置をするんじやないか。
でも、お新さん、そだちがわるいんですから、あんまり始めつからたんとお責めなさると…………
あれまた！あんまりたんとつて、おまへおもつても見て御覽よ、わたしが緣もなにもないものをかふやつて拾ひ擧て世話をするんだから、いふこと丈聞かせる樣にするのはあたりまへじやないか。
下女はいひ伏せられて、返す言葉を知らず「小聲になつて」さう仰つしやれば、お新さんがお尤に違ひ御坐いませんよ。
是から一日たつて又ぞろ翌日、小女が失策を致し升た。丁度積物やが歸つたあとで、御新さんがお勝手へ出て襷掛になつて梅干を積る用意をして入つしやる處へ客來があつて側に見居たおきくが臺處に一人になつてしまふと、笊の中の青梅の中に赤く熟したのが見て余りおいしさう故、ツイ一ツ摘んで、食てる處へお新さんが戻つておいでて、此時は前日のことのあつ

たあヿ故、一層嚴しく、折檻され、夕飯も食べさせられずに寐かされ升た。

子供だもんで、

とうらは申譯をし升た、

でも、おゝいふいぢきたなをして、人が見れば匿くすのだもの、わるいではないか、

おうらはおづ〳〵しながら、

でも、御新さんへ、しをきをなさる時、なんだかかふ怒つて入つしやる樣だと、きいちやんが御新さんをたゞこわい方だと斗り思ふといけませんもの、

またしてもうらは馬鹿をいふネ、わるいヿをする時は可愛がられない、善いヿをする時斗り可愛がられると思わせる樣にしなければいけないじやないか?

おや、さうですか? 御新さんは何も御存じだから。

とおうらはうろんげにいひ升た、御新さんは此時少し血相をかへて、

エー、さうだとも、穩當にすればよし、曲がつたヿをする時はゆるしませんとも、何でも正しくしなければ…………

といひ升たが、其言葉に違わず、おきくは折々忘れてはよくないヿに手をだし升たから、其都度折檻されました。ある時御新さんがいつもよりひどくお怒りなさつたのをおうらどんが悲しがつて泣いて居るのをおきくは驚ろいた樣に丸い眼を開いて見詰めて居て、それからおうらどんの膝へよぢ登つてその顏を覗き込み、モウ決してわるいヿはしないから、泣いちや、いや、と幾度かくりかへしていひ升た。

# 家政

## 家事小言數則（二）

ふみ子

破産は臺所の隅より起る。少しく文字を解し、若くは他の仕事を爲さむとする細君方の中には往々にして家内の事務を甚小なる事と爲しいはるゝやう、妾等は臺所の長官、針部屋の朝臣たるの細務に堪へず、願くは之れを措きて他の快活なる大事に與らむと。是一應尤なる述懷のやうに聞ゆれど、是未だ深く思はざるの言なるのみ。針部屋の事務素より一衣

一絲の細に止まり、臺所の所要亦飲食の用を辨ずるに過ぎずと雖も、破産は往々臺所の隅より起るものなるとを思へば、是等の細務と雖も決して疎にすべからざるとなり。元來如何なる家にても、一家の收入といへるものは大抵限あるものにて、隨て消費すれば隨て得らるゝといふが如き容易きものには非るなり。故に支拂の責を掌る細君は常に注意し財布の口を漫りに緩めず、能く其收支相償ふやうにせねばならぬなり。經濟に經驗ある或る婦人の言にも、一家非常の事ありたる際支出する金額は隨分目に立つものなれど、斯く目に立つ金は却て割合に消費するとの少きものなり。夫よりも日々の飲食雜用に消費する金員所謂臺所向きの費用なるものは、一々之れを擧示する時は實に一錢二錢のはした錢に過ぎざれど、此はした錢と侮りて何人にも目に立ぬ所の金員却て積りて莫大なるものとなるなり。是素より日々夜々間斷なく費やす所のものなる故とはいへ、又人々の些細なりと侮りて注意せざる遍大に消失を大ならしむるの原因には非ずやと思はるといはれたり。成程諺にも油斷大敵といふとあれば、必ずく破産てふ大敵は臺所の隅に潜伏するものなるとを忘れ玉ふな。

生産的費用と不生産的費用。一家の費用は衣食住に要する者の外、交際費臨時費教育費慈善費など種々の類別あるべけれども、之れを大別する時は生産的費用、不生産費用の二種となすとを得べし。而して此二種の費用に就き何れか最も必要なるといへば、或は生産的費用と雖も左迄早急に差迫りたるものに非るもあるべし。又不生産費用と雖も之れを消費せざるを得ぬものもあるべし。故に其必要不必要は今一概に之れを論ずべからざれども其何れの方へ金錢を主に用ゆべきかといへば、無論生産的の方向に向つて用ゆるやうに注意するを可とす。一例を擧ぐる迄もなけれども假令ば不生産的費用の最極なる贅澤費をば全く省きて、之を教育費若くは其他資本の部に組込などは最も見易き利害なりとす。之を換言すれば金錢は成るべく積極的の方向に向つて使用するを可とす。然らざれば滔々として流るゝ水、匆々として消行く光陰と同じく決して再び反り來るとなき者となるなり。故に一金の支出にも其生産的と不生産的と何れの方向に向つて用ひむとするものなるかを、先づ手を放たぬ内に一應自問すべきとなり。財を積むよりも德を積め、必要なるべき財を貯へて一家の計



Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

を爲し一は他人の厄介とならぬやう、又子孫をして自助自主の地歩を得せしむるやうの準備を爲すことは、素より必用なることにてあれど、單に財を積むことにのみ注意して他を忘るゝ時は、却て醜惡なる心情に陷り易きものなり。故に人は財を積むとも究極善を行ふの一手段として用ゆるものなることを忘るべからず。德を積むは遙に財を積むの効に勝る。されど亦財なき時は往々にして人に煩を及ぼすことあり。故に必要なる財を貯ふるは善を爲すの一準備にてはあれど、夫れと同時に倘且つ夫よりも大なる德を積むてふ最後の目的を忘るゝなかれ。是亦細君たるものゝ家人に對し、又他人に接する上に於て常に服膺し置くべきことなり。

## 家內重寶錄

### 梅花の挿し方

梅花は紅白何れをも珍重すと雖も、先づ一重の白梅を以て第一とす。祝ひの筵などには成るべく白梅を生くべし。白梅には香を尊び紅梅は其花を重んずること一昧の傾なるが如し。而して其挿し方は白梅は成るべく輕く閑靜なる姿に見するを好しとし、紅梅は稍枝多く賑やかに挿す方可なり。瓶は成るべく古きぞ似合しき。夜陰の席には白梅を生るこそ古歌の心ありげにて奥床しゝ、梅は小枝多くて矯にくきものなれば湯にかざして後矯むるなり。又紅白二種の梅を挿すには、白梅を以て心となし葉ある花をあしらふを法とす。是は梅は葉なき花なるに二種まで挿し合す時は何か葉ある花をあしらはざれば見憎き故なり。先づ寒菊など用ゆるぞ宜しからむ。然れども梅は元來香を賞翫するものなれば匂ひある花を添ふることは梅花を賞する所以の意に背く。故に梅花の香を損わぬ花を添ふべきなり。又庭に梅樹ありとも床に梅を挿むと妨なし。是も亦梅は匂ひを主とするものなれば、他の花とは異なり其處此處より薫り來るを却て妙とし、敢て差合を忌まざるなり。是等の心得は何れの流義にも通じて用ひらるべし。

### 梅花を貯ふる法

紅梅にても白梅にても七八分開きたる花を採り、梅干漬の上へ仰向けて並べ置く時は、何日迄もいき／＼として新に咲出たる時の姿を失はず。之れを後日取出して吸ひものゝうかしなどに用ひ、又は櫻花の鹽漬の如く鹽漬となし置きて、白湯に

和して飲料とするも宜し。

腸詰の製法　先づ豚の腸を取り其中に塡充せる汚物を除き、之れを一尺計りの長さに截りて其内外の面に附着せる脂肪及び上皮を削り去る時は、透明にして强靱なる薄管を得べし。是を先づ鹽漬けと爲し置きて、次に豚の「ロース」を細かに刻み、擂り鉢にて能く擂り、之れに胡椒パタなど適宜に加へて彼薄管に詰め込み、麻絲を以て其兩端を緊しく縛り置けば、直に之れを食卓に供し得べきなり。而して二ヶ月間は之れを貯ふるも妨なし、但肉を腸管に詰め込む際には、竹管を以て其口に挿み指頭を以て壓し入るれば大に便利なり。

甲州産のころ柿極上なるを、眞中より切り開きて種子を除き、長竿を蒸したるものを心として柿四五枚にて之れを包み巻き夫れに温飩の粉に葛少許入れたる堅き衣を掛けて揚げものとなし小口切にして食する時は至て美味あり。

鮭切身料理　鮭の身を厚さ一寸許りに截りて、之れに適宜の胡椒を振りかけ、一枚の西洋紙を採りて其紙面に牛酪を充分に布き、其紙を鮭の切身と同じ大さに切り、切身一片宛を其紙に載せて四隅を捻り、船の如き形として强き火に上せ十分許りも炙るなり。

## 田家のこよみ

杏 翁 子 編

○彼岸三月十七日　○春分三月廿日　○雀始巣　○櫻始開　○雷乃發聲

### ○三月十日より三月廿五日迄農事手當

○播種　柿、桑、茶、松類、胡桃、甘藷、蕃椒、扁豆、刀豆、菜豆、中茄子、夏陀稜花、南瓜、瓢、冬瓜、絲瓜、蜀黍、早玉蜀黍、薏苡、百合、蕓薹、仙人穀、鹹蓬、茴芹、等四月中旬迄播種してよし、

○移植　葡萄、野木爪、林檎、鉢桃、栗、楮、黄雁皮、木半夏、土常山、紫陽花、明石屋柳、有加利柳、天門冬等移植してよし、

○接木　葡萄、柿、栗、林檎、杏、海棠、梅嫉、繍毬、茱萸等接てよし、

○挿木　梅、杏、梨、無花果、棗、牡丹、芙蓉、木槿、杜松、葡萄挿してよし、

○分栽　油葱、萱茗、梅喜等根分して可なり、

○雜事　農家一年の計は將に此季にあり、萬事手晩油斷すれば一年の恨みなるべし、殊に播種は霜を忌む種類の他は早きに過るも晩きに失すべからず。夏時の花草、野菜、又は初秋の雜穀は多く此季節播種するものなれば、去年作りたる畑に同種の物を播種せざる樣すべし、

### ○園藝法

#### 第六　摘芽法

葉芽を摘除して其數を減ずるときは、花芽の發生を盛ならしむべし、之に反して花芽を減ずるときは、結果の數を節省して幹枝の生長を促すべし。

#### 第七　露根法

春季根邊の土を堀り除きて、大根の之より稍尖端に至るまで大氣に暴露し、夏の終りに至る頃再び土を掩ふべし、此の如くするときは樹根を露出するの間養液の供給を減ずる而已ならず、再び土を掩ふの後も旣に日光及び空氣に觸るゝ間養液を吸取するの力を減じて、容易に恢復すると能はざるに至るを以て營養一時遲緩なるが爲に花芽の發生を促すなり。

又果樹の周圍の土壤を堀除きて、礫を以て其穴を埋む此法我國に古より行はる、果木の結實を促すの一法なり。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 雜録

## ひゝな遊び

ふみ子

ひゝな遊びといふとは、何日の頃より始まりしものにや。諸説まち〳〵にして其確なるとを知るを得ずと雖も舊くより行はれたる者と見ゆ。或は神功皇后三韓を征し玉ひての御歸途船路を播磨灘まで來り玉ひしに、風浪いと荒かりければ御船を津の國住吉の岸に寄せ玉ひ此處にて御上陸あり。皇子を分娩し玉ひたる後住吉へ御社參あらむとせしが、未だ御忌みの日限中なりしかば紙にて御身の形と皇子の形とを剪らせ玉ひ是にて御祓あり、然る後御社參ありしより起りて、ひゝな遊といふもの出來しなり。故にひゝなは其始め母子の形にてありしを、後に夫婦の状に移りしなりといふ説あれど此は甚信じ難し。されどうつぼもの語、源氏もの語、枕册子などにひゝなあはせなどいふと往々見へたれば、兎に角其以前よりありたるものなるとは疑なし。但三月三日に之れを行ひ、又是を棚へ並べて酒食を供ふるとは何日の頃より行はれしものにや是も亦能くは知らず。ひゝな問答といへる書に記るす處を見れば「三月三日にひゝなを立る事は、己の日のなでものより始りたる事なるべし。三月上の己の日には古はらへをするとあり。祓へとは身の災を祓ふなり。此祓をするには陰陽師の許より紙の人形を造るを、其人形にて身を撫でゝ陰陽師に遣せば、夫れにて祓へを行ふなり。人かたは我身代りになるなり。されば、人かたをかたしろともなでものともいふ。源氏もの語あづまやの巻の歌に　見し人のかたしろならば身にそへて、戀しき瀬々のなでものにせむとよめるにて知るべし。古は彼人形かたを陰陽師の許へ遣はし、祓へを行はせたるを後世は祓への具にはせず。棚へ並べて酒食を供し遊びものとはせり。是己の日の祓への具と、古の女子の常の戯れのひゝな遊びと一ッに交りしなるべし。今日世に紙のひゝなをひなの本式なりと云ひ傳へたるは、彼己の日の祓の紙の人形より出し故なるべし」とあり。是亦一説として參考に供すべき價値あり。予思ふに其濫觴は兎に角此ひゝな遊びといふ事は、女子には随分能き遊びなり。維新以後は追々に此遊び廢りて、今は主に人形を弄ぶのみ。小女子主人公となりて賓客を招

くなどいへる事は少なきやうなれど、かゝる事は小女子の為には、随分有益なる遊びにてあるべければ、古の儘ならずとも其模様を取りて一般に行はれ度ものなり。殊に今の小女子は日々學びの窻に遊び、自然家に在るとも少く、随て家事を見習ふの暇もなかるべければ、かゝる時を機會として手づから食物を鹽梅し、其親族知己朋友など心易き人々を招きて自ら小女主公となり、他日の為に其下稽古を為し置くも亦一得ある事ならむと思はる。尤其道具の飾り付、又は賓客の接待、料理の種類などは自ら改革を加ふべきこともあるべければ、是等は各自の考に任せて種々に工夫し、當節に適する雛遊びを為すとも其は人々の工夫にあるべし、兎に角小女子をして他日の主公となりし時の考を養成せしめ置く事は、大に宜しきことと思ふなり。

## 女子に學問を勸むる文

左に掲ぐるは、王子孤女學院の一孤女定子と云へるが、日科の題に應じて作りたる文章なり。一字を改めずして其が儘に掲載するは、此學院の女生が學力と精神との如何ほどなるやを、在のまゝに同志に示さんとてなり。

一筆申上候陳ればをい〳〵文明開化に趣き學問も開け女子のねうちが有る事が知れ女子が學に就き勉強致さねばならぬように相成り候時に當り女子が學問が出來ると己れをたかぶり人をいやしむるように相成りかへりて無學の者の方がよく御座候此の如く己をたかぶる事なくけんそんにして共に學問を勉強致し度御勸め申候

# 批評

### ○女子興風雜誌

今年に入りてより、新らしき女學雜誌二つを加へたり。其一を女子興風雜誌とす。高桑靜子主幹する所ろとす。井上かづ子女史の祝辭によれば、高桑靜子は北陸豪農の一嬢なるが、夙に我國女子の地位甚だ卑きを嘆じて自から世上改革者の一人を以て任じ筆舌縱橫殆んど一世の男子を叱咤せんとする人なりとぞ。其論說、「女子の大本」なる者を見るに、方今の要、先づ女子の品格を造るとを第一とし、精神上の修養と、實力上の養成とを以て、現今の女子教育の二大要務となしぬ、又その女子興風雜誌に自ら題する詩に、

爲仁應爲天下仁。 爲悲應爲天下悲。 如今天下輕與薄。
更無一人任仁慈。 請看二千餘萬女。 終生呑恨閉蛾眉。
一代運命歸他家。 一身自由寄男兒。 有髮鬖々絲爲雲。
有容嬋娟花欲語。 此容此髮豈他弄。 天禀眞有造化助。
勿言纖手不堪戈。 單身解散英眞樂。 勿言細腰不堪步。
千里奔走茁鵬女。 瑕玖由來難輕視。 大難時爲男子先。
擧首東洋勢日傾。 女權不振幾千年。 妾有一片不乾涙。
不濺輕々才子袖。 輕々才子彼何者。 忘却東洋大計謀。
如今歐米勢日輝。 富强文明冠宇宙。 不知東洋貧弱國。
內無實力外無守。 却思富國强兵策。 文明多自女子才。
綾羅之美綿繡麗。 寒夜畢竟濺血來。 嗟妾幸生多事時。
單身恥爲女子媒。 願首女風永不競。 優情美俗何日回。
鹿鳴館暖春如海。 才子佳人影婆娑。 却思寒村織萬女。
夜々擣砧投晉梭。 一身幸福敢不求。 天賦自由又不復。
慷慨呑涙千秋愁。 感泣帶血万古哭。 嗚乎人生所貴唯
至誠。 成敗利鈍何足逐。 憂國獨非男子業。 救時又在婦人族。

### ○御國の母

第二の雜誌を「御國の母」とす。曩に「國母論」を著はしたる、丹靈源居士の編輯する所なれば、其保守主義、佛教主義たるを明らかに知らるべし。發行の主旨なるもの、下の如し。

白蛇の胞に蜥蜴は產れず、香餘子の蔓に胡瓜は生らぬ道理で、貞女や、節婦の產たるの子は、必ずしも國家を靖すんずる所の人となるを得ん、亦慈惠と、貞操とは我御國の婦女の最も重んじ、最も尊ぶべき美德にして、而も此美德を備ふ所の母の產み、且つ養育せし子供は、必ずして忠臣孝子にしも、國を護り、家を齊へ得たるの實例古來より最も多し、故に荀くも御國に產れし婦女は、此美德を備へて御國の母となり、而して萬世に名譽を得るも、千歲に恥辱を殘らざる樣、子供を養育せんには母たるものが、浮世を三分五厘と輕々敷も做ず、最も大切に注意して、人生五十年の間は、名譽の花の培養時と觀念して、窮窟なりとも、可成的眞面目で、正直に世を渡り、而して國を富し人を利せんとを切に望む、聊か記して本誌發行の鬮となす。

### ○女子書翰文附歌式

こは、女學通信會にて、小中村義象氏が講述せられしものを册子に集めたるにて、女子書翰文につきて心得べき條々を先づ說き、又、文の範と料とを集め、最後に歌の書式を添たり、而して、書翰文の書は小野鵞堂君認ため、歌式の書は、杉楓邨、多田親愛、坂正臣、大口鯛二等それ〴〵道に明らかなる諸君筆をとられし也。

# 摘要

### ○宗教に關する女學校に望む

在靜岡、天則生の投書として自由基督教第六號に載するは、宗教に實威して未だ受洗せざる人士の希望を代言せり。

### ○經濟上に於ける女子の勢力

同志社文學第六十二號に、小野英二郎氏が古代の論文を載せ、交際社界に女子を出して、今日の如く無用の浪費を爲すとを制し(一)。社會の趣味嗜好に勢力ある女子をして儉約ならしめ(二)。女子をして貯蓄せしむる者の事を論ず。





Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

# 通信

淡海子編

## ●高知通信

◎女犯罪人　去一月中高知地方、及區裁判所撿事局に押送せらし女犯罪者は、竊盜九人、盜贓牙保一人、賭博一人、拐帶一人、贓品故買一人、故殺二人、謀殺一人、之を男犯罪人に比するに十二分の一弱なり。又一月中高知監獄にて獄則を犯し減食の處罰を受けし者、百八十三人の內、廿七人は女犯罪者なり、

◎女生唱歌會　去る十二日小高坂小學校に於て、廳下近邊各小學校女生徒親睦のため唱歌會を開かれたり。

◎中村女子手藝傳習所　同所にては、今回第三回高知品評會、第一高等小學校幷に香美郡宮家村、安藝郡和喰村、兩小學校品評會等に出品すべき、展覽品の依賴を受けたるがため昨今教員生徒共に非常に繁忙なる由。

◎醫師の派遣　高知育兒會產婆教授所に於ては、今回產婆養生上につき擴張を計り、適當の醫師を撰任し、帝國大學、產科硏究の爲派遣し、歸途京阪地方產科學校を視察せしめんとて、追加豫算議案を常設委員の會議に付せられたり。

◎高知佛教婦人會　仝會第十六回例會は、十八日午後一時ゟ本部なる本町本願寺內に開く。

◎高知慈善會　高知教會の姉妹等は、兼て本會を組織し種々なる運動をなし居られしが、此度事務上の都合にて幹事及會計として山田、外山の兩姉、書記として片岡土田の兩姉當撰せられたり、目下同會員なる、小倉姉は貧民學校(生徒二十名)を世話せられ、外山姉は職業上の爲めに盡力せらるとぞく、因に記す本縣に於ける婦人運動上彼の萬國博覽會に付き、諸協會の仝書を編纂せらるゝに付、唯この會のみ其資格ありと云ふ。

## ●會津通信

◎保義會　若松町に保義會なるものあり其主旨とする所は、同志結合して緩急相助け變難相救ひ、鄕黨を保護し推ては以て國を愛するにありといひ、會員現に一千餘名の多きに達し會員にして、死去するときは其遺族に送金し、病氣に罹り火災に類燒するが如きことあれば、一定の出金によりて之を慰め之を救ふ等の働をなすにあり、會長、副會長、出納掛、部長、監督、委員、書記等の役員ありて事務に從事せりといふ。

◎校友會　若松高等小學校に於ては、卒業生の發起により舊交を溫め情誼を厚ふするの目的を以て、校友會を設置し過る日其發會式を同校內に於て開き、唱歌祝文演說等あり、終て男女兩分して、各親睦會を開きたりといふ、會するものは男子八十一名、女子五十名にして、他行等によりて欠席したるものも多かりしといふ、

◎貸座敷　當地の貸座敷は長家と相混じて設けられ其數三十一戶にして、公娼百〇八人あり、此他公然の秘密を以て密賣淫を業とするの女子は、數百人に上るべし、地方の矯風上志士の奮起するを要するや切なりとす、

## ●三重縣通信

◎三重私立女學校　三重私立女學校は維持困難のため、有志者はその繼續方に力を盡せしも、遂に其甲斐なきに至りしかば、養正學舍に合併を申込みし處、條件付のため談判破裂せしとは嘗て通信せしが、同校は最早迚ても維持の目的無きを以て、致方なく無條件にて此程、鈴木敏勝氏より養正學舍に申込みしにより、舍長大西重寬氏は熟考の上兎角の返答に及ぶべき旨を答へぬ、三重女學校をして玆に至たらしめたるは、これ誰の罪、三重縣人の女子教育に冷淡なる何ぞ是れ甚だしきや、因に云ふ養正學舍は裁縫に重きを置く保守的の女學校なり、

◎養正同窓會女子部　いぬる十二日養正學舍にて例會を開きぬ、婦人製艦費を獻納す、三重郡川島村の女丈夫、稻垣なを子は金百圓を、度會郡宇治山田町福島来義氏の實母、ためを子は金拾圓を製艦費中に獻納したき旨孰れも出願せり、

◎貞女　この程縣廳より、桑名町大字風呂町二十二番地に住む大田久藏の妻、いせ(五十五)に左の褒賞を與へたり、

桑名町大字風呂町　太田久藏妻いせ

其方儀幼年にて父を喪ひ候處母に孝心切に行屆、元來貧究殊に婦人にて益々不如意の中厚く心力を盡し、縫績、洗濯等格別相勵み其賃銀を以て母に着用、或は滋味を供し且又亡父追慕の念不淺慕參等も、無怠慢追年夫に配し候家內彌親睦候段、孝直兼格別奇特の事に候、依之爲其賞鳥目二十五貫文被下候猶此上益可相勵候也

明治二十五年十二月二十八日　三重縣廳印

## ●長野縣通信

◎上伊那參督矯風會　同會は創設以來日尚淺きにかゝはらず、會員の風紀矯風に向つて、德義修養等に力を盡され、眞に少數の會合なれども、世の光鹽を負ふ者と云ふべし。因に云ふ同會は先頃東京王子村の孤女學院へ寄附金を募り、僅か數錢の金を集め今は金四圓五十八錢に及びたれば、之を女學雜誌社の孤兒の友に托し、同院へ寄附せられたりと云ふ、

# 女報

淡海子編

●芝離宮行啓の御摸様　皇后陛下には去る廿日午後一時卅分、御出門にて芝離宮へ成せられ、大日本婦人會博覧會出品物を御覧あらせられたり、當日の御陪乘は室町典侍供奉は、香川皇后宮大夫、山内皇宮職試補、桂侍醫北島、六角の兩權掌侍等にして同二時芝離宮に着御あらせられ暫時、御休憩の上婦人會委員長を始め外一同へ、拜謁仰付られ右終るや委員長、毛利侯爵夫人の御先導にて陳列品を細かに御覧あらせられ、再び御休憩の後三時卅五分、還御あらせられたり、

●兩陛下の御出品　皇太后陛下には、大日本婦人會の手を經て閣龍世界博覧會へ御自製の織物數反を御出品あそばされ又　皇后陛下には色紙短册へ御歌を御染筆相成りしものを御出品遊ばさるゝ由にて、婦人會事務所へ其旨御沙汰ありしかば婦人會の面目此上なしとて、同掛員は坐ろに感泣し居れりと洩れ聞きぬ、（國會）

●大日本婦人會の閣龍博覧會出品物　毛利公爵夫人の會長におはす、大日本婦人會の米國博覧會出品物は此の程より、芝離宮の御廣間を申し請ひて陳列せられぬ、承はるも畏こし此事已んとなき御邊りにも疾くに御心を傾けおはしましゝ御事とて　皇后陛下には一昨日をもて右御覧の行啓を故さらに仰せ出され、掛り官の説明ども一々聞し召させ御滿足大方ならず見えさせ玉ひしとは、出品諸氏も如何に有難くも辱けなくもやいらいけん。

●布哇女皇の地位　米國公使舘に達したる華盛頓發の電報に據れば、布哇國は遂に米國の保護國に屬せしも、米政府はリリオカラニ陛下をして舊の如く、皇位を保たしむる事に内決したりと云ふ、此れに付き某外交家、曰く右の電文より察する時は、女皇陛下には其の皇位だけに保たせられ、政治經濟等一切の大權は總て之を、米政府に委し其狀恰も、佛政府の、安南王に於けるが如きものならんと云々、

●女權と國權　女權擴張の刑法改正の請願を院議に付すべき要求者中には、隨分珍らしき顔の人を見受けたる中にも、取分け面白く思ひしは、古莊嘉門、嘉悅信之なんど、孰れも國權黨の剛の者の加はりしが、如何なる譯にや昨日兩君は要求者たるを取消す旨申出でられたるよし（日本）

●福島夫人の慰勞會　福島中佐が萬里の遠征を終へて歸朝するの日も最早近きたるを以て、歡迎會及び松本彰功會ともに夫々歡迎の準備中なるが、同中佐の夫人は頗る婦德に富み、能く内助の實を擧げて、中佐の大業を翼成せし事なれば、中佐の歸朝を待つて別に同夫人の慰勞會をも開かんとて、舊藩主、戸田子爵の夫人總裁となり、辻新二氏の夫人幹事となりて、普く同鄕出身の女性に賛成を求めつありと。

●結婚離婚月報　東京市十五區に於ける、本年一月中結婚離婚屆出數及前月比較增減は左の如し

結婚　三九二　（前月比較減　三二五）　離婚　一一五　（前月比較減　七七）

●萬國會議開會期日　婦女の進歩、此部は婦女が成し得たる各種の事業に關する事を議するものにして、千八百九十三年五月十五日より開會す、（二件官報）

●スミス女學校　スミス女學校は近來漸く萎靡し來りて、昨今は日增に學生減少して僅々二十九名となり、又其資本金と云へは唯六百十圓餘にして實に不振の姿なりと、（北門新報）

●モリス夫人　米國費府の慈善家モリス夫人には、昨年渡來後は山下町帝國ホテルに滯在して、專ら貴夫人間の傳道に盡力さるゝ由。每週水曜日午後は帝國ホテルにて基督教研究會の催しあり。集まる者信者未信者平均二十名内外にして、原田助氏は大抵每回通譯の勞を取られ且又折々教理上の勸話を述べられ女子獨立學校の加藤敏子も余暇を以てモリス夫人の傳道を助力さると云ふ。先週水曜日の集會には來會者に各々聖書を贈られ自今益々斯の道を研究せんと奮ひ居る者もありし由に聞けり。去月下旬には府下の重立ちたる貴夫人に招待狀を發して懇話會の催しありしに、鍋島侯、井上伯、後藤伯、土方子の夫人を初め來會者無慮三十名余りにして席上加藤敏子、モリス夫人の談話などありて仲々の盛會にて、自今每月一回は這般の催ふしある由なり。

●ウエスト孃の紀念　金澤に於て客死せられたるウエスト孃の爲め、同地に紀念舘及び紀念標設立の計畫あり、全世界の同主義者に通牒して寄附金を募集すべしといふ。（二件福音新報）

●喜雪庵の七事式　喜雪庵小花女史は去日を以て千家に傳はる、七事式と云ふを牛込の自邸に催されたり、本式は花月、旦座。廻炭、廻花、茶かぶき、數茶、一二三の七事を行ふものにて、擧止幽雅にして彼の洋流婦女子の倣ひ能はざる慰みなるが、來會の名媛には、大岡子爵夫人かん子、同第二令孃よね子、北條子爵（侍從北條氏恭氏）令孃智子、大橋鍬子、葛岡さた子（葛岡信綱氏夫人）同第二令孃のぶ子、大槻すて子、山島輝子、宗匠には、大田原宗悅、松平彌九郎の諸子臨會して交も當、番（主客の事）の席に就きて見事の技倆を振はれたるは、むかしゆかしくぞ思はれける、（讀賣）

●婦人會の運動　山口縣萩地女性のキリスト信者が組織の、萩婦人會にては公娼設置を非とし、運動第一着として總代、秋山まち子去十八日公娼贊成者なりとの説ある、萩警察署長二宮久氏を訪問して、一編の意見書を呈し且つ貴下の意見は公娼を非とするにある歟、將た可とするにある歟と質したるが、二宮署長は只今之れに答辨する能はず、已に設置願書も縣廳に出で居る事なれば、縣知事に於て何分の裁斷あらんと雖も、此意見書は拙者參考のため一見したければ預り置かんと答へ、まち子は其儘退出せしといふ、（防長）



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●生徒の實例　東京市牛込區、私立櫻井小學校高等四年生、齋藤ウタ子は性質温和にして、學術も亦衆に勝れ、語寡く、愛深く、友達に交るによく信を以てせりされば學校に於ける生徒仲間にも氣受けよく、校内評判の娘となり、校主や教員か常に生徒に諭すに、ウタ子の如く信あれといふ程なりき。(新教育)

●大村家未亡人の上京　九段靖國神社競馬場中央に建立したる、故兵部大輔大村益次郎氏の銅像落成式は本月五日を以て執行し、種々の餘興をも催したるが、目下山口縣下に居住せる、同大輔の未亡人は當時儀式の盛んなりし通知に接し、家の面目之に過ずとて悦ひの餘り、右建立の事に就き盡力したる彫刻師、大熊氏廣氏の許に最も懇切なる禮状を寄せ、且つ右銅像を參觀の爲め老體ながらも、來る六月頃上京する旨を申越せしといふ。

●花井お梅の近狀　市ケ谷監獄にて苦役中の、お梅は此頃非常の勉强にて、日々四丈餘の木綿を織るとの事なり。

●新聞紙法案協議會(第一回)　新聞紙法案の兩院協議會は、細川潤次郎氏議長となり、昨日午前八時三十分より其第一回を開けり、條項の協議に先ッて、第六條「內國人にして滿二十歳以上の男子に非ざれば、發行人、編輯人印刷人となることを得ず」第八條「發行人は保證として左の金額……を納むべし」第十八條「安寧」秩序を妨害し、又風俗を壞亂するものと認むる、新聞紙は内務大臣に於て其發行を禁止し、若くは停止することを得」の三ケ條を協議の項目となすことに定め、先づ第六條より彌々協議に取り掛りけり、劈頭に島田三郎氏は、貴族院何の見る所ありて、女子の發行人編輯人印刷人となることを禁じたるやと質問したるに、貴族院は現行法に從ひたるものなりとの答辯あり島田氏は更に問ひ返へして、若し貴族院修正の如くせば今日女學雜誌の編輯に從事し、居る者の如き之を止めざるを得ず、天下斯る不理あらんやと論じたるに、小畑美稻氏は何故か怒氣を含んで、女子が生意氣になるから之を禁じたるのみと大呼し、其他種々の辯難あり別に採決にも至らざりしが、其時貴族院委員は豫算會議ありとて散會を求め、衆議院委員之に應じたり、然るに第二回を開くことに付き、衆議院の委員は同日晚景より之を開かんと主張し、貴族院委員は豫め期限を定むること能はずと主張し、双方の間に一場の激論を生じたりしも、結局同日の晚景より開くことに決し一先づ散會せり、(讀賣)

●金澤女學校　本月十五日金澤女學校内女子傳道學館にて卒業式あり、卒業生は五名にして、二名は越中富山に、一名は越前福井に、一名は暫く金澤にて音樂を修め、一名は當女學校に止まりて英語課を修むことなりたり、

●佛教徒の婦人教會　去る十二日富山縣上新川郡東岩瀨町發願寺に於て、婦人教會を開き同會幹事、馬場瑞忍氏開會の主意を述べ辨士、玉木與琢氏婦女道德を振起するの必要を說き、服部燈耀氏一場の說教をなせしが、來會者七百余名ありて盛會なりしと、

●青山英和女學校　の手工部は今回新築せらるゝよし、

●私生兒に就て

一私生兒を擧ぐるは何歳の婦人に於て最も多きや。

此の調査を精密になしたる國は、現時只瑞典と璉馬の二國あるのみ、此の二國の事實は必ずしも世界各國の事實と合一せざるべしといへども、此表を見て余輩聊か意外に感ずるものあり。

| 國名 | 十五 | 二十 | 廿五 | 三十 | 卅五 | 四十 | 四十五 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 瑞典(都部) | 七 | 五十一 | 七十一 | 六十二 | 四十一 | 十七 | 一 |
| 瑞典(鄙部) | 三 | 廿六 | 四十一 | 三十九 | 二十九 | 十三 | 一 |
| 璉馬(都部) | 六 | 三十三 | 五十二 | 四十七 | 三十一 | 十四 | 一 |
| 璉馬(鄙部) | 六 | 三十九 | 五十八 | 四十七 | 三十三 | 十五 | 一 |

此表による時は、私生兒の最もあり易きは、初期の未婚婦女にあらずして、二十五歳より三十五歳までのものにあり。四十以上のものすら、二十以下の者に優れり。されどこれを以て世界各國を律し難かるべく、且つ又此中には、中年の寡婦が擧げたる私生兒を算入したるかと疑はるゝふしなきにあらず。若し私生兒を擧けし未婚婦女の年齢を知るを得ば、更に興味多かるべし。

二私生兒を擧ぐるは何種の婦人ぞ

此の調査をなせし國も亦甚だ稀有のとなり。今擧ぐるものは一千八百八十三年に於ける蘇格蘭の私生兒の母一万〇〇十人に就て調査したるものなり

| | |
|---|---|
| 家婢 | 四千七百〇六人 |
| 製造場の傭女 | 二千四百四十二人 |
| 農女 | 九百八十五人 |
| 裁縫女工 | 六百〇七人 |
| 無職(重もに職工の娘) | 八百三十一人 |
| 自由業者の娘 | 五十四人 |
| 不詳(重もに寡婦) | 三百八十五人 |
| 總計 | 一万〇〇十人 |

(福音新報)

●鹽谷梅女の貞勇　古し石見山吹城の主衞、小笠原某の妻梅女なるものあり、軍戰涙の如く哄吽雷に似たる騷亂過紛の間に在つて能く家門を守り、子女を養ひ教育怠なかりしが一日敵兵の襲ふところと成り、群り來つて亂行を恣まゝにす、梅子謹愼子女を膝下に停めて敢て動かず、敵兵前に迫つて、小笠原の所在を問ふ、若し隱秘して漏すなくば、即ち汝が命を絕んと、銳鋒白刃を振翳し、强暴威喝するあるも、梅女益々沈默して、少しも慟する氣色なし、敵手の一人怒りに乘じて其肩を斬るも、尚は一舌の答ゆるものなし、是に於て群敵五六相共に刃を交へて之を討ち、傷血瀧の如く滾々として流るゝに臨み漸く一聲吽んで曰く、我が身體は百千に碎かるゝも此の精神は鐵城の門を固くす、如何に万兆の敵軍あるも敢て破る能はざるべし、我身が婦女にして斯くの如し男子たる夫の身にしては又た數層の强堅に在り、汝等如き鼠輩の爲め空しく敗滅すべきものならんやと、遂に伏倒して息絕へたり、水常に流るべきも結冏凝集の氷たらば遂に能く鐵杆堅に勝る。





Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

# 孤兒之友

寄勸子編

## ●長野縣參晉矯風會

同會は會員の盡力にて募集せられたる金四圓五十八錢を添左の如き書を我孤兒の友へ寄せられたり

寸紙呈上仕候貴社益御隆盛奉大賀候陳は大須賀亮一君は多年女子教育に從事せられ此事業の爲めには一生を捧げんとする精神特に昨廿五年已が私財を一擲して孤女院を設立せられ以て貞操潔白の女子を養成せられんとする御主意天下何人か君が美なる決意に感泣せざらんや吾々數十里の僻村に居り常に新聞雜誌上にて君が爲國家若心難行の有樣を見聞仕り同情相憐自ら禁ずる能はず爰に會員相謀り聊か左記の金募集仕り貴社に投じ候間入貴の一端とも可被成下樣何卒御取計ひ御取次ぎ被下度右願上候也

明治廿六年二月廿一日

長野縣上伊那郡東箕輪村

參晉矯風會

女學雜誌社内孤兒の友御中

## ●孤兒の友取次義捐金第七回報告

金貳百六拾四圓五十貳錢九厘六回迄各孤兒院へ寄附金

| | | |
|---|---|---|
| 金壹圓也 | 東京無名氏 | 孤女學院へ |
| 金壹圓也 | 山口縣某女史 | 仝 |
| 金壹圓五十二錢九厘仝 | 婦人會 | 仝 |
| 金拾圓也 | 横濱無名氏 | 仝 |
| 金壹圓八十錢 | 明治女學校愛の睦 | 仝 |
| 金四十四錢 | 吉田千代氏 | 仝 |
| 金拾六錢 | 吉村てる氏 | 仝 |
| 金三圓也 | 嶋田三郎氏 | 北海孤兒院へ |
| 金二十錢 | 女學雜誌社紙屑氏 | 孤兒の友へ |
| 金四圓五十八錢 | | 孤女學院へ、(内譯) |

| | |
|---|---|
| 金五拾錢 | 福澤龍太郎 |
| 仝拾錢 | 金子珍彦 |
| 仝五錢 | 柴祖一 |
| 仝拾錢 | 永井忠之助 |
| 仝三拾錢 | 藤澤友藏 |
| 仝貳拾錢 | 岡豊吉 |
| 仝拾錢 | 山口親彦 |
| 仝拾錢 | 藤澤秀彦 |
| 仝拾錢 | 武村喜三次 |
| 仝拾錢 | 戸田理三次 |
| 仝貳拾錢 | 井上慶太郎 |
| 仝五錢 | 栗樫太郎 |
| 仝五錢 | 藤澤貞彦 |
| 仝五錢 | 柴伴十 |
| 仝壹圓 | 丸山友四郎 |
| 仝拾錢 | 遠藤爲重 |
| 仝五錢 | 山口正幸 |
| 仝五錢 | 福澤鐵十 |
| 仝五錢 | 中村陸次 |
| 仝五錢 | 柴梅彦 |
| 仝拾錢 | 三井峯二郎 |
| 仝五錢 | 無名氏 |
| 仝壹圓〇三錢 | 東箕輪學校職員生徒一同 |
| 仝拾錢 | 山口榮太郎 |

合計金貳百八拾八圓廿三錢八厘

## 孤女學院報告

第一月中寄附金

| | | |
|---|---|---|
| 金五圓七拾七錢 | 築地 | 三一教會外國婦人會 |
| 金五拾錢 | 東京 | 醫科大學 三輪氏 |
| 金壹圓 | 東京 | ミス、メラ |
| 金壹圓八拾錢 | 東京 | 明治女學校愛之睦 |
| 金壹圓廿錢 | 東京 | 無名氏 |
| 金五圓 | | 後藤たか子 |
| 金貳拾錢 | 千葉 | 無名氏 |
| 金貳圓 | 東京 | 川口龜吉氏 |
| 金五十錢 | 東京 | 仝夫人 |
| 金貳十錢 | 仝 | 大富敬次郎氏 |
| 金壹圓 | 仝 | 大塚亘城氏 |
| 金壹圓 | 仝 | 黑崎仙太郎氏 |
| 金貳圓 | 仝 | 伊藤鮎實氏 |
| 金卅錢 | 仝 | 鈴木喜一郎氏 |
| 金五十七錢 | 千葉 | 藤原きん氏取次 |

内

| | | |
|---|---|---|
| 金五錢 | 千葉 | 遠藤氏 |
| 金四十錢 | 仝 | 無名氏 |
| 金二錢 | 仝 | 町野氏 |
| 金十錢 | 仝 | 馬籠氏 |
| 金壹圓五十錢 | | 無名氏 |
| 金拾四圓五十錢 | | 雜收入 |
| 金拾圓 | 米國 | ミセス、ポットの少年傳道會 |
| 金八圓 | 東京 | 監督ウヰリヤムス氏 |
| 金五十錢 | | 深町氏 |
| 金三十錢 | | 高橋氏 |
| 金拾五錢 | | 中矢代氏 |
| 金拾錢 | | 木寺氏 |
| 金五錢 | | 木村氏 |
| 金廿錢 | | 新井氏 |
| 金拾五錢 | | 川崎氏 |
| 金壹圓 | 長濱 | 高等小學女子教育有志 |

内

| | |
|---|---|
| 金十錢 | 淺見ふみ子 |
| 金五錢 | 吉田ちか子 |
| 金五錢 | 寺村せき子 |
| 金五錢 | 土屋きん子 |
| 金五錢 | 川崎しづゑ子 |
| 金五錢 | 北村ふト子 |
| 金五錢 | 田邊みね子 |
| 金五錢 | 淺見みつ子 |
| 金五錢 | 伊藤みな子 |
| 金五錢 | 林いし子 |
| 金五錢 | 近澤すゑ子 |

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

金三錢　高田ゑい子
金三錢　野村さら子
金三錢　吉田みれ子
金卅二錢　石田氏夫人
金壹圓　東京　無名氏
金拾錢　東京　三一神學校大谷氏
金貳拾五錢　東京　傳道女舘
金貳圓　米國　無名米國人
金壹錢　無名氏

合計金六拾貳圓八拾五錢

## 支出

金廿四圓八拾錢九厘　米代
金貳圓五拾一錢九厘　肉、八百屋物
金拾圓九拾四錢　味噌、醬油、炭、薪、其他雜品
金壹圓三拾三錢　器具代
金卅錢　新聞代
金四圓　醫師車代
金壹圓拾八錢五厘　藥舗拂
金八圓　諸給及謝禮
金五圓廿三錢　コンデンスミルク及牛乳代
金五拾三錢　郵稅
金八拾二錢　運賃及車代
金壹圓四拾九錢三厘　教育費

合計金六拾壹圓拾五錢六厘

## 一月分決算表

金六拾貳圓八十五錢　一月分收入高
金九拾貳圓四十四錢壹厘　廿五年ヨリ越高

合計金百五十五圓廿九錢一厘

金六拾壹圓拾五錢六厘　一月分支出高

差引殘金九拾四圓拾三錢五厘　二月へ越高

## 寄附物品

喜の音二冊　孤兒の友
チョキ一、襦袢一、筒袖一、中皿五　無名氏
絹入二枚　無名氏
鹽魚一籠　柏屋氏
ニッケル側懷中時計壹個　某令孃

女學雜誌每週　同社
信仰の友　同社

右之通リニ御座候也

廿六年二月

東京北豐嶋郡瀧の川村
孤女學院

## ●曉星園報告

### 第一月中

本月中寄付金

總高金八拾六圓七拾錢也
內金參拾圓ハ別途金ニ付預ケ
差引金五拾六圓七拾錢也
外金三圓也　東京家十二月半月分家賃
又金六拾三錢　肥シ代
合計金六拾圓三拾三錢也

### ●支出ノ部

一金七拾圓四拾六錢七厘　總高

內譯

金廿九圓四拾八錢也　米四石六升代
金三圓五拾錢六厘　肴八百屋物代
金三圓貳拾七錢五厘　味噌醬油鹽
金壹圓三拾六錢八厘　炭三俵石油六升五合代
金四圓四拾六錢八厘　山羊馬飼養料
金壹圓九拾七錢　器具代
金貳圓〇四錢　郵券代
金貳圓〇壹錢　小兒運動場ブランコ用
金八拾七錢　醫藥料
金貳圓也　家賃二軒分
金六拾錢五厘　書籍筆紙墨
金五圓　修繕費大工へ
金壹圓拾五錢　役者手當金
金拾壹圓四拾九錢四厘　旅費及運賃
金貳拾七錢　糸針綿
金貳拾五錢　荷車稅
金拾二錢壹厘　履物代
金拾九錢　牛乳壹鑵
金四拾錢　馬蹄鉄代

合計

差引金拾圓拾三錢七厘也　不足
又　四圓三拾錢　十二月分不足
合計金拾四圓四拾三錢七厘　不足

右之通ニ御座候何卒薄信ナル僕ヲ助ケ常ニ御熱禱ニ加ヘ玉フテ主ヨリ賜ル樣共ニ御祈リ被下度奉願上候

○本園昨年十二月十日都合ニ由リ當地ニ移轉致シ候以來万事好運ニ向ヒ申候是レ全ク主ノ御導ト一同感謝罷在候也

○本園ニ於テ適當ナル職業ヲ撰ブ爲メニ永ク苦心致シ專ラ懇願致居候處主ノ御示導ニ由リ遂ニ足利郡小俣村白石鐵太郎君ノ御盡力御協賛ヲ得テ機織ヲ初ムルヿニ相決シ申候出來ノ上ハ見本御望ニ由リ御送リ可申上候間何卒精々御贊助御盡力御用被仰付一日モ早ク獨立ノ方法相立候樣御助ケ御教へ被下度伏テ奉願上候凡ソ二月中旬ヨリ織出ス心組ニ御座候夫ニ付テハ多額ノ金員モ必要ニ御座候得者何卒御熱禱被成下御贊助ノ程伏テ奉希上候

○本園育兒牛島要一子ヲ佐久山町村上勘二郞君方へ又山田ナヲ全エツノ二子ヲ上𭐂島村栗原甚太郞君方へ何レモ御請求ニ由リ實業傳習ノ爲メ差遣シ申候也

右之通御報告仕候也

明治廿六年一月

下野國那須野原三島
育兒曉星院

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

# 神戸日報

神戸市榮町一丁目
神戸日報社

神戸日報　は嚴正中立を堅守し侃々の議諤々の論以て法律政治經濟其の他百般の事項を講究す

神戸日報　は特に實業に着目留心し農工商の保護者たるの責任を盡す

神戸日報　は記事斬新報導迅速にして殊に内外商業貿易の景况を詳記す

神戸日報　は百般の商况物價及び本港の輸出入品（品名、數量、仕向地名、買入商店名共）を詳悉するため毎號特に二頁の大附錄を添ゆ

神戸日報　は毎號艶麗巧妙なる畫入小說二篇を掲げて看者の心を樂ましむ

神戸日報　は關西唯一の大新聞にして政治家にも實業家にも官吏にも書生にも將た婦女子にも讀んで益ある新聞なり

神戸日報　は關西各地の實業社會に特に廣く愛讀せられ且つ紙數日々數万枚を發刊する新聞なれば廣告の効能比類なし

神戸日報　は定價一枚金壹錢五厘〇一ヶ月前金二十五錢郵稅一枚五厘〇廣告料五號廿一字詰一行一回金拾錢行數回數に依り割引すべし

●再版出來●

嚴本善治氏序
德富猪一郎氏序
竹越竹代氏編

# 婦人立志編

定價二十錢
郵稅　四錢

●再版には出書に對する各新聞雜誌の批評を附錄として記載せり

今や婦人敎育の問題喧びすしと雖も、婦人の模範とすべき女傑の傳記を讀ましめ、自ら鑑みしむるにあらずんば効あるなし。此の書は泰西各國女傑の傳記を婦人立志の助となすべき樣に編述したるものにして、愉快を以て讀む間に、自然に女傑の精神を呼吸せしむるを目的とす。且つ從來ありふれたるものと異なり、新たに泰西の好著述を涉獵して作りたるものにして、婦人文學者あり、婦人宗敎家あり、婦人政治家あり貞婦あり、賢母あり、慈善家あり、女學生、家庭及び人の母姉たるものゝ必らず一本を具へざるべからざるもの也。若し家庭に於て燈火の下、姉妹母子相對して之を會話せば、其面白さと利益とは如何に大ならん。」

婦人の傳記の外、泰西の大學者が、自立、自助の精神を以て述べたる文章を、其間に挿みたればまた一の家庭修身書と云ふべし。

處々には美麗なる銅版、木版の繪を入れたれば愉快限りなし。

發賣所　東京新橋出雲町　警醒社書店

賣捌所　麴町區下六番町六　女學雜誌社



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 文學界

第二號要目　二月廿八日發兌

茶道の祖、利休居士（十頁完結）　天知

悲曲 琵琶法師（四齣出始め）　古藤庵

人世に渉るとは何ぞや（八頁長論文）　透谷

筆のすさび（思ひ出し事聽き得し事）　花圃女史

馬上人世を思ふ　無聲旅士

（附錄）

女歌仙家集講義　大和田建樹

兼好法家集師

其他彙報には、當今文學の記實あり、新刊雜誌の批評、紹介あり

定價表　東京市内一冊六錢六冊卅三錢十二冊六十錢　地方郵税共一冊八錢六冊四十五錢十二冊八十四錢

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

大取次所　◉東京東京堂、武藏屋、東海堂、巖々堂◉京都、東枝律、便利堂、◉大阪岡嶋支店、福音社、◉熊本草野◉函館、福音社◉神戸福音社



當社又

東京赤阪區仲之町二番地三號より

東京麻布區霞町廿一番地へ移轉す（注文通信共當所へ御遣し被下度候）

但爲替振出局は從前通芝口郵便局の事

東京麻布區霞町二十一番地

護教社


## 女學雜誌代價廣告料及無料廣告

○白赤双方合せ購讀の分

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 十冊 | 前金 | 五十八錢 | 府外 | 六拾三錢 |
| 廿六冊（半年） | 同 | 一圓四十三錢 | 同 | 一圓五十六錢 |
| 五十二冊（一年） | 同 | 二圓六十錢 | 同 | 二圓八十六錢 |

○白赤の内一方購讀の分

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 六冊 | 前金 | 三十五錢 | 府外 | 三十八錢 |
| 十三冊（半年） | 同 | 七十三錢 | 同 | 七十八錢 |
| 廿六冊（一年） | 同 | 一圓三十錢 | 同 | 一圓四十三錢 |
| 一冊 | 金六錢 | 郵税 金五厘 | | |

| | | |
|---|---|---|
| 一行（廿七字詰） | 一回 | 前金拾錢 |
| 同 | 三回以上 | 一割引 |
| 同 | 六回以上 | 二割引 |

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道徳なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增さと定む。


發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三